

一般財団法人自然公園財団 加藤和紀さん

国立公園での仕事は、地域の人がたちとのネットワークが支える。



第6回 卒業生 職場訪問

子どもの頃から家族で自然に親しんでいた加藤さんは、江戸川大学社会学部ライフデザイン学科(現・現代社会学科)に入学。国立公園について学び、日本と海外の国立公園をテーマに卒論を書いた。2010年3月卒業後、一般財団法人自然公園財団に就職した。「自分の好きな自然を仕事にできることは、うれしかったです。でも、実際に働くと、自然の表面だけでなく大変な部分も見えてきました」。今では、楽しむだけでなく、自然の裏側まで知り自然を細かく見ることができ幸せだという。

卒業生職場訪問シリーズの第6回目は、一般財団法人自然公園財団で働く加藤和紀さん(31)取材した。一般財団法人自然公園財団は、東京本部のほか国立公園・国定公園に22の地方支部を設け、ビジターセンターを運営している。加藤さんは箱根支部に勤務している。(取材・写真・池谷明日香)

加藤さんが所属する箱根ビジターセンターは富士箱根伊豆国立公園の箱根エリアの自然散策の拠点となる施設で、年間約6万人が訪れる。職員は8名で、パークボランティアは約100人。ジオラマや映像、手作りの資料などを使用しながら、地形や火山、動植物についての情報を提供している。

自然散策ガイドも行っており、休日ともなると20人から30人のお客さんを引き連れて案内をする。加藤さんが一番好きな仕事だ。

さっそく、自然散策に連れて行ってもらう

散策は30分と1時間のコースがある。私たちはセンターの周

囲をぐるっと回る30分のコースに同行した。センターを出るとすぐに、加藤さんがコレ食べてみて、とヤマボウシの実を差し出した。ヤマボウシは、ぶよぶよはじめたら食べごろで、マングローミたいな味がする。落ちた果実はイノシシや鳥が食べるという。

センターの裏側はすく森で、センターと森の間の遊歩道を歩いた。加藤さんが、これはクロモジですよ、と大きな葉と黒い斑点のある樹皮の低木を指差す。その枝を軽く削っておいをかいてみてと勧められ、やってみるととても爽やかな良い香りがした。気品のある香りがするので、和菓子用の高級爪楊枝の原料として使われるのだそう。

観察しながら歩いていくと、草の葉に透明な羽の虫がとまっている。加藤さんはカバンから常に携帯している図鑑を開いてさっそく調べていた。図鑑にはなかったが、蛾の仲間でしょうかのこと。

もう少し歩くと、突然開けた草原に出た。あっちこっちに穴が掘られている。「あ、それはイノシシ。家族で住んでいて夜になると出てきて穴を掘る。野良猫のようにたぐさいです」。

短時間にもかかわらず、自然についての知識が体験をともなう体で吸収される、そんなガイドだった。

自然環境保全や施設の維持管理も大切な仕事

センターの仕事は自然散策ガイドや、ボランティアと協力して実施する自然観察会などの自然体験事業だけではない。

公衆トイレやベンチ、看板の修繕など公園施設の維持管理事業、外来種の駆除や植生復元などの自然環境の保全事業の仕事もある。最近では主任になって事務所の事務作業が増えて外に出る時間が減ってストレスも感じているようだ。「案内の仕事であれば1年中やってもいいですけど」。

加藤さんのご厚意でセンターを後にして箱根を案内していただくことになった。

まず向かったのは芦ノ湖近くの加藤さん行きつけのレストラン。この女将さんとはボランティアを通じて知り合ったそうだ。昆虫が好きなお子さんがセンターにスズムシなどを提供してくれていると、ワカサギの天ぷらを食べながら話してくれ

(裏面に続く)



ヤマボウシの実。マンゴーのような味。



爽やかな香りがするクロモジ。



ホシベッコウカギバという蛾だった。



危険な枯れ枝を処理する。



ビジターセンター周辺すべてが加藤さんの仕事場だ。

温泉ソムリエの資格を持つ加藤さん手作りの資料。

センター内のジオラマを使い説明する。



十三代目の店主山本聡さんと加藤さん

地域に根差す「箱根ビジターセンター」の加藤さん

食後は箱根ジオパークの大谷へ。白煙が立ち昇り火山活動が活発で立ち入り禁止区域もある。箱根ジオミュージアムでは、箱根の火山活動や温泉についての解説がパネルや映像で紹介されている。スタッフはみなさん加藤さんと知り合いで、楽しみに話していた。

甘酒を飲んでいきましよう、というお誘いで、次は400年続く甘酒茶屋へ。十三代目の店主山本聡さんと加藤さんは、登山道の補修のボランティアで知り合った。「加藤さんは、フットワークが軽い人で人柄がいい。本当に箱根が好きで苦しいことも楽しいことに変えられる人」と山本さん。

ている登山道の補修のことを聞いた。

人が安全に歩けるように階段を作ったり、修理したりする。階段の材料は、落ちていた木を利用して作る。林道は車が通れない場所があるので、丸太を背負って歩くので肉体労働だ。でも、登山者から「ありがとございます」と声をかけてもらえることが糧となると言っ

「自然が好きだから、自己満足でやっている」と加藤さんは謙遜する。けれど、どんな仕事でも、人と人のつながりがなければ、志は成立しない。

今回の取材で、箱根ビジターセンターの運営には地域の方々が様々な形で関わっていることがわかった。地域の方々と深く打ち解けながら、箱根ビジターセンターの加藤さんとして箱根の自然のために尽力している姿を見ることができた。

箱根ビジターセンター基本情報

環境省 箱根ビジターセンター
〒250-0522
神奈川県足柄下郡箱根町元箱根 164
(TEL)0460-84-9981
(FAX)0460-84-5721
(Email) hakone-vc@kanagawa.email.ne.jp
無料駐車場完備 (40 台)
○バリアフリー対応
・ウォッシュレットトイレ
・車イスの無料貸出し
・筆談
・車イス対応自然観察コース

イベントもいろいろある

定期イベントとして、ミニ観察会や四季観察会では、ビジターセンター周辺のその時期に合った旬な自然を、スタッフごとにそれぞれ独自の視点から観察をして解説してくれる。いずれも事前申し込みは不要で、当日参加できる。ほかにもさまざまなイベントがあるので、詳しくは、<http://hakonevc.sunnyday.jp/index.html> で。

国立公園とは

国立公園は、美しい日本の自然を後世に伝えていくために、国が指定し、保護・管理しているところだ。北は利尻礼文サロベツ国立公園から、南は西表石垣国立公園まで 34 ヶ所がある。

日本の国立公園は地域制国立公園と呼ばれ土地の所有にかかわらず区域を定めて指定される公園である。そのため私有地が 26% (平成 29 年 8 月現在) 含まれる。国立公園内に住んでいる人も多く、農林業などの産業も行われていることから、国立公園の管理は、人々の暮らしや産業などとの調整をしながら進められている。

また大勢の人が訪れれば、トイレや散策路などの維持管理やゴミ処理に費用がかかる。自然公園財団は、公園利用者が負担する駐車場料金を財源にしているが、それだけでは十分とはいえない。そのため、国立公園の利用と保護を同時に進めるためには、自然解説や情報収集、美化清掃などを行うパークボランティアとしての地域の人々と協働して管理運営をしていくことが欠かせない。